

花の里温泉の由来

名湯伝説の始まりは『山水館』から

昭和51年(1976年)。料理旅館として創業した『山水館』。目の前には名勝、摂津峡が広がり「お客様に、この雄大な風景を眺めながら温泉に入ってもらえたら…」と考え、地質調査の専門家に依頼することになりました。

摂津峡での温泉開発は、「温泉博士」と呼ばれるほど著名な専門家による岩盤の割れ目具合の調査から始まりました。

摂津峡は、古生代末期(約2億5千万年前)に堆積した砂岩や泥岩が白亜紀の末、約7千万年前頃に貫入した花崗岩の熱によって変成し、堅いホルンfelsという岩石になった地域で、「摂津峡のホルンfelsには、かなり良い具合に割れ目が発達しており、この割れ目を伝って地下の深いところまで、雨水が浸透しており、他の温泉地同様に、ここでも温泉として利用できる地下水は十分含まれている」という結論が出されました。

次の問題は、その地下水が温泉として十分利用できる程度に暖められているかということでした。古くからある温度の高い温泉は、火山の近くにあるものが多く、ここでは、火山エネルギーで地下水が暖められ温泉になっています。しかし、火山のないところにも温度の高い温泉は沢山あります。摂津峡の岩石は、もともと海底に堆積した砂岩や泥岩、冷たい岩石です。それが地下に貫入してきた花崗岩のマグマに触れて加熱され、ホルンfelsという岩石になったもの。このように、岩石を変えてしまう程、高いエネルギーを運んできた花崗岩のマグマの溜まりが、摂津峡の地下にその昔あったと考えられたのです。それを示すかのように、摂津峡の上流や下流の河原、また、東の三好山にはマグマが固まって花崗岩となった岩石の部が露出しています。

しかし、掘削工事しても、温泉が出るとは限らない、やめておいた方がいいというアドバイスも有りからありました。が、不思議に毎夜のように、温泉が湧き出る夢を見たのです。

夢に賭けてみることにしました。掘削工事は、昭和57年(1982年)7月から始められたもの、1年経つても温泉が湧き上がる気配はありませんでした。その間、生活費も事欠くぐらい工事にお金をつぎ込み、あきらめかけていた2年後の昭和59年(1984年)3月、ついに高質温泉の発見に成功したので、298mを掘った段階で、誰もが目をこすりました。

奇蹟の湯が湧き出てきたからです。湯量も相当量あり、天高く吹き出していました。それが最初の、奇蹟でした。私財を投げうって、2年がかりで掘り当たらなかった天然温泉の泉温は、摂氏28.4度、pH9.44の本物のラドンを含むアルカリ性単純温泉でした。夢にまで見た『山水館』の温泉がこうして、誕生したわけです。そして、四季折々の花が楽しめることから、『花の里温泉』と名付けました。自慢は目前に摂津峡の屏風岩や奇岩が迫る露天風呂と、高さ8mの自然の巨石を利用した大岩の内湯風呂です。関西の奥座敷、近畿の名湯としてお客様にご利用いただいております。

● 名湯伝説 ● 元 摂津市長 西島文彦氏

再度の奇蹟で、新たな温泉が噴出

平成11年(1999年)3月、再び奇蹟が起ることにあります。平成3年(1991年)から4年間も「この地に大阪の温泉脈あり」と、人の山師が言い続けていました。この言葉に動かされるように、地質調査だけでもしてみようと思ふようになっていきました。

そして、平成7年(1995年)9月、地質学者により地下1千メートルの温泉調査の結果、温泉脈が確認されたのです。それにより、摂津峡の地域は、古生代末期に堆積した砂岩や泥岩を主体にした堅い岩盤(丹波層群)の分布している所です。これまでの摂津峡での温泉掘削の経験もあります。その経験などをもとに、北摂山地の山裾に当たる、山水館に続く摂津峡の「下の口」入り口の地質を調査してみると、かなり割れ目が発達して、しかも山裾というところもあり、山地に降った雨水が地下水となって流れ下り、摂津峡の中の温泉とは比較にならない位の十分な地下水があると、いつかこの時点で予測されました。

次の問題はやはり、温度でした。摂津峡「下の口」から東の三次山にかけて花崗岩が分布。新しく温泉を掘ろうとしている地は、この花崗岩の南の端になります。新しい花崗岩の場合は温泉の熱源としても十分期待できるのですが、調査によれば、7千年前、熱源としては無理としても、深く掘ることで地球の深部からの熱が期待できるということでした。平成9年(1997年)12月、温泉掘削許可申請を提出し、翌年の平成10年(1998年)3月に許可がおり、6月から工事がスタート。困難な作業が続く中、900メートル掘った時点で、湧き水が出、温泉脈を発見。烟に湯気が舞い、摂氏42度のお湯が1分間に80〜90リットルも自噴したのです。その後も、平成11年(1999年)3月までに1350メートル掘りました。

さらに驚いたのは、関西では稀な、アルカリ性純重曹泉だということ。この湯質は、三天美人湯として知られる和歌山の龍神温泉より濃度の高い泉質で、飲めば、消化器病や糖尿病、痛風などにも効能があり、入れば肌もスベスベになる、別名「美人湯」が、高槻の地で発見されたのですから、これは奇蹟の湯です。

新しい温泉名は「祥風苑」。温泉が湧き出たときの、すがすがしい春風(ちなん)でこの名をつけました。ところで、今回も不思議な夢を見ました。深い谷底に立っていると、畳畳ぐらいの龍が浮いてきて、龍と目があい、龍が顔をなめに来た瞬間に目覚めたのです。まさしく、龍神様が夢枕に立ったのです。平成11年(1999年)10月11日には、夢の中に現れた龍と龍を「祥風苑」内に作成し、祀っています。高槻の地で、二つの泉質の異なる温泉を手に入れたことは、本当に奇蹟です。この奇蹟を起す原動力になった専門家の方々には心より感謝の気持ちでいっぱいです。できうる限り多くの方々に、奇蹟の湯を体験していただきたいと願っております。そして、新しい温泉が誕生したときに、温泉発掘の神様と呼ばれる先生の「温泉は地球の体液。貴重なもの、感謝の気持ちで入浴してほしい」という言葉が思い起され、心もリフレッシュしていただければ、幸いです。

● 山崎治 理学博士 大阪教育大学教授 ● 三木八海 龍神温泉(和歌山県) 川中温泉(群馬県) 湯の川温泉(鳥取県) ● 飲みの重要性 飲めるといことは 源泉の詰ったコップでは飲む野菜といわれています。